０６・次の日も昼間から民宿の部屋で、ねちねち気持ちいいことを教え込まれて乳首イキさせられる

『０５・恥ずかしい事を全部告白させられて、意地悪あまあま『負けセックス』する』の翌日。

とある年の夏。七月二十八日（火）十四時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は雨。かなり激しく振っている。気温は二十五度程度。

少し湿度は高いが、心地よい夏の昼間。

場所は、民宿内、弥映の部屋。

主人公、弥映の隣で眠りながら、夢を見ている。

〝５０％超えてませんか？

……確かね、超えてるはず。前にファンの方が教えてくれたんです〟

夢の中で、弥映が記者からのインタビューに答えている。

……なんだ。『ファンの方』とは。
と思うが、よく見ると、何やら現実とは様子が違う。
夢の中の弥映は、現実の弥映が着ていた服よりも派手で、露出度の高い格好をして、現実の弥映よりも濃いめの化粧で。
でも、とても腰の低く、かつ余裕のある風格で、優しくインタビュアーに微笑みかけている。
現実とは共通点が多いような少ないような。
とにかくまるで、人気女優のような風格である。
……夢らしい夢である。

〝私、なぜかいつも……。
とは言っても５０％ですけど……。死んじゃう役なんですよね。
たとえば春に出たあの作品なんか……あぁ！　何でもありません！〟

夢の中の弥映が、唐突にネタバレをした。

……この部分は、紙面や動画ではカットされそう。

５０％のくだりごと、全滅かもしれない。
はぁ。弥映ちゃんってバカだなぁ。

――あ。これ、夢か。

主人公、そんな事を思いながら、これが夢であると理解する。
それから、こんな夢を見てしまう理由も、すぐに察する。
件の映画のヒロインを演じた女優さんと、弥映の顔が、どことなく似ているせいだ。

〝だからえーっとあの。
もしかすると私って、みなさんにとってはちょっと弱そうというか、儚いイメージがあるかもしれないんですけど。
えーっと、何て言えばいいんだろう？〟

夢の中の弥映がまごつく。

その姿をハラハラと応援しながら、主人公は気づく。
昨日からなぜ、弥映の事がこんなにも心配で、こんなにも一緒にいなくてはならないと

思ってしまうのか。
その理由の、一部を思い出した。

〝あ！　だから『新作では幸せかも！　いや、やっぱり……？』
『もしかすると、作中死亡率さらに上がっちゃう？　それとも下がる？』
そういった予想も含めて、ぜひ見届けていただきたいです〟

なぜなら件の映画も……５０％のうちの一作品だからだ。
主人公は映画を見た日、ヒロインが突然姿を消した挙句死ぬラストを見て。
どうしたらこの結末を回避できたのかと、その夜一晩じゅう悩んで、眠れなかったからだ。

……そこで、目が覚めた。

ＳＥ１　雨の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【小さめの音量で流す】

【0―8秒ほどまで流してセリフ】
【その後、トラック終了まで、もう一段階小さめの音にして流し続ける】

目を覚ますと、噂の弥映が主人公の顔を覗き込んでいる。
そして、主人公と目が合うなり笑った。

……とりあえず……現実の弥映ちゃんはここにいるし、元気そうだ。
生きている。

●中央　至近距離
「【※マークまで、低めの声で。
何でもないふりをしているが、本当は起きるのをずっと待っていた】
あー。
【少し間をあけてから】
起きたー。
【少し間をあけてから】
おはよぉ。　※
【額に軽く一回だけキスする】

ちゅっ」

主人公、仰向けになって寝ている状態から、弥映にキスをされる。
そして、のそりと起き上がる。

主人公から見て右耳側。左隣に、弥映が寝転がっている。

SE2　主人公が布団から起き上がる音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「おはよーございます……。
うぅん……私、どの位。寝てました……？」

●中央　右寄り　至近距離
「【きょとんとして。そんな深刻な睡眠時間ではないため】
んー？　そんな寝てないよ。三十分位？」

言いながら、弥映が、スマホのロック画面を灯して見せてくれる。

十四時十五分。なるほど……。

ちなみに弥映のスマホのロック画面は、デフォルトと思われる、抽象的なイラストだった。

弥映は『見せてもいい、見られていいもの』をロック画面にするタイプなのだろうか。

それともスマホはあまり使わなくて、画面表示にも無頓着なのだろうか。

得た情報から弥映のパーソナリティを分析したいところだが……。

これでは、想定できる範囲が広すぎる。

〈主人公〉

「そっか。よかった……。

あ。雨、まだ降ってるんですね……」

弥映がここにいる事、それから時間の確認を終えて安堵すると、今度は天気が気になる。

すごい雨だ。朝はいい天気だったのに。

●中央　右寄り　至近距離
「そう。朝晴れてたのにね。夜までずっと雨だってさ」

〈主人公〉
「ごめん……寝ちゃって……」

そして、ここでようやく意識がしっかりしてくる。
そうだ。自分は本来眠るつもりなどなかったのだ。
起きて、色々したい事があったのだ。
なのに……。

と、主人公は己の我慢弱さを呪うが、なぜか弥映は上機嫌である。

●中央　右寄り　至近距離
【とても機嫌がいい。少しも怒っていない】
ふふふふ。
あんた、すごい気持ち良さそうに寝るね。
【しれっと嘘を言う】

これなら起きるかなと思って鼻つまんでみたのに、全然気づかないし」

〈主人公〉
「えっ!?　嘘！」

●中央　右寄り　至近距離
【楽しそうに笑う。とても機嫌がいい】
あはは。うーそっ」

そんな。そんなにも自分の眠りは深いのか!?
と、主人公がショックを受けるまでもなく、弥映が笑う。
……しょうもない嘘をつく人だ。
まぁ、そんなしょうもない嘘に引っかかるほど、自分は寝ぼけていたともいえるが
……。

すると、また、流れるように弥映の顔が近づく。
ここは、なんて甘く、とろけた世界だろう。
なのに、すっかりこれに慣れ始めて、当たり前のように自分から顔を寄せてしまってい

るほど……たった半日ほどで、主人公の世界は激変してしまった。

弥映、中央右寄りから中央へ移動する。

ＳＥ３　弥映が主人公に近づく音
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【唇に軽く一回だけキスする】
ちゅ。
【少し間をあけてから。唇に二回、水気多めのちゅぽっとしたキスをする】
ちゅっ♥　ちゅっ♥
【少し間をあけてから】
でも、起きて欲しかったのは本当」

ＳＥ４　弥映が主人公に近づく音２
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離

「【嬉しそうに】
あんた、マジでイく度に寝ちゃうね。
【ものすごく嬉しい】
毎回、めっちゃくっついてくるし。ふふふふ。
『人間の身体は熱いから、夏場に無理にくっつく事はない』
という主旨の事を言っているが、本当は離れてほしくない。毎回、密着して眠りたい】
暑くないの？　裸の人間って熱くない？」

……そう。弥映はとことんご機嫌だが、主人公は現状に激しく後悔している。
……また、気持ちよくしてもらって、寝てしまったのだ。

それは特に、おかしな事ではないらしい。
昨夜の弥映の言葉や、本で読む限りは。
自分自身の経験としても、とてもよくわかった。
……したら、疲れるのだ。人間は。

だからといって、そういう問題ではない。

主人公は弥映といる間、できるだけ眠りたくなかった。
その理由は色々あるが……弥映にしがみついて寝たのは、眠気に対する、最後の抵抗と言えるだろう。

それに、人と密着するのは、本当に気持ちがいい。
主人公は、周囲には自立した、クールな女性で通っている。
だから、たとえば友達がベタベタくっついてくる事はあっても、逆はできない。
また、親もたくさん甘えさせてくれるようなタイプではない。

だからあくまで自分は『周囲を、仕方なく甘えさせてあげる側』というスタンスでいたものの……。実際はただの逆張りだ。
本当は羨ましかった。自分も、誰かに甘えてみたくてたまらなかったのだ。

〈主人公〉
「……暑くないと言ったら完全に嘘なんだけど」

●中央　至近距離
「【続きを促す】」

うん」

〈主人公〉
「でも……くっつきたい。って、いうか……」

そんな主人公の気持ちも、弥映にはとっくにバレてしまっていそうだ。
もごもご、言葉を濁しても無駄。
何せ昨夜は……いや、つい数十分前も、あれだけ本性をさらしてしまったのだから。
もっとも、何が何でも主人公が弥映に密着して眠る理由は、それだけではないが……。

いずれにせよ、弥映は嬉しそうである。

●中央　至近距離
「【上機嫌で。同意見でとても嬉しい】
ふふふふ。でもくっつきたいんだ。
【すごく嬉しい】
へーぇ♥
【額、目、頬、と三回、ランダムに位置を変えてちゅぱちゅぱと、水気の強いキスをする。

浮かれた印象のキス】
ちゅっ♥　ちゅぱっ♥　ちゅ♥
【少し間をあけてから。甘ったるい声で】
じゃあこれからも、ずっとくっついて寝ようね。
【唇に三回、ゆっくりと、水気多めのキスをする。
さっきよりは少し真面目な印象のキス】
ちゅっ……♥　ちゅ。ちゅ♥
【少し間をあけてから。
※マークまで、にやにやと甘くからかう。
『さっきすっごい』は『さっき、すっごい』だが、繋げて言う】
ねぇ。さっきすっごい可愛かった。
【少し間をあけてから】
ずっとエロい声出してたし。
腰振（ふ）りながらぎゅーってしてきて。
ぐすぐす泣きながらしがみついてきてさぁ。
昨日までセックス知らなかったなんて、信じられない感じだったよね。　※
【主人公に『セックスした回数』をたずねている。
本当は自分も把握しているが、主人公が正確な回数を知っているか知りたい】

あの時で何回目だっけ」

〈主人公〉
「……回」

主人公、思う。

うう。恥ずかしい事を言わされるのにも、すっかり慣れてしまった。
……ううん。もうあきらめて素直になろう。
私は言わされる事が嬉しい。
恥ずかしくて、でも幸せだった時間を、こうして弥映ちゃんの口と、自分の口から思い出させられるのが、嬉しいと。

そうだ。私は、弥映ちゃんが嬉しそうな事が嬉しい。
それだけで、なんだか涙が出そうになる。
出会ってまだ、二十四時間も経っていないのに。もう、弥映ちゃんの事で頭がいっぱいだ。
単純だと、性欲におぼれたと笑ってほしい。

でも、私は真剣だ。
誰も信じてくれなくても……弥映ちゃんの事を好きになってしまったのだ。

――ほんとに、意味がわからない。
私は昨日まで、何が『イく』って事なのか知らないのと同じ理由で、何が『恋』なのかを知らなかった。
本で、映画で、ドラマで、漫画で。
恋ってものがどんなものなのか、どれだけ説明されてもピンと来なくて……。
自分なりに色んな角度で、色んな立場から想像して考えてみたけど、それでもよくわからずにいた。
友達が恋愛の話で盛り上がっていてもついていけなくて『もしかすると、自分には一生縁がないのかもしれない』と思っていた位だ。

だから、もしかすると、これは恋じゃないのかもしれない。
何か、もっと違う、別の感情なのかもしれない。

でも、私はこの人が好きだ。
たとえ、この気持ちがなんと呼ばれるものだとしても……。

私は今弥映ちゃんと一緒にいたい。もっと一緒に過ごしたい。もっと知りたいと思っている。
だから……ずっと離れずにそばにいる。

●中央　至近距離
「【ますます機嫌がよくなる。
主人公が正確な回数を覚えていたので、とても嬉しい】
そんなにしてた？
ふふふ。今日あたし達ご飯食べるか、するか寝てるかしかしてなくない？
ふふふふ♥
☆【※１０秒※　キスする。とにかく嬉しくてたまらない、上機嫌なキス。
ただし、あまり音がうるさくならないようにする】☆
★　ちゅっ♥　ちゅっ♥　ちゅっ……♥　ちゅ♥　ちゅっ♥　ちゅ……っ♥　ちゅ♥
【思い出したように。語尾が上がる。
ここで『そういえば、それ以外の事もしていた』と、今思い出した風にふるまう。
実際は全く忘れていない。照れるあまり、軽い女性を演じてしまっている】
あ……♥
【とにかく機嫌がいい】

ラジオ体操も行ったか」

主人公、弥映のあまりの浮かれぶりに呆れつつ、でも嬉しくて、思う。

……まったく。人が真剣にあなたの事を考えているというのに。この人、ずいぶん浮かれてる。

はい、そうです。行きました。
健全な生活は、あらかじめ定めた行動を忠実に繰り返す事から生まれる。
私はそう思うので、朝はしっかり昨日と同じように過ごさせていただきました！

●中央　至近距離
「【額に軽く一回だけキスする】
ちゅっ。
【『朝は、あんな事があって、びっくりしたよ』という意味で言っている】
朝びっくりしたよ。
【頬に軽く一回だけキスする】
ちゅ。

【思い出すだけでますます上機嫌になる。
※マークまで、トラック０５から０６に至るまでの経緯を説明する】
初えっちして、朝方も何回もして。
ちょっとうとうとしてたら起こされて。
どこ連れてってくれんのかと思ったら、ラジオ体操って。　※
【とうとう嬉しすぎて笑ってしまう】
ふふふふ。
【すごく嬉しい。『初デートが公園でがっかり』という発想は全くない。
『私は恋人に大切にされている』と、自慢したいような気持ち】
初デートが公園。ふふふふふ」

〈主人公〉
「ま、毎日行ってるんだから。いいじゃん！
大事だよ。ラジオ体操は。
一日に三回したら、一日に必要な運動量をクリアするって、お医者さんも言ってたよ！」

主人公、恥ずかしくなって、思わず言い訳をしてしまう。
だが、弥映がこれをとても喜んでいる事はわかっている。

だから余計に恥ずかしいのだが。

なぜなら、朝方からすでにご機嫌の弥映だったが……。

一緒に公園に行ってからは、ますますずっとニコニコ、いや、もはやニヤニヤしているのである。

恋愛の事が全然わからない主人公でも、それが何を意味するかわかる。

弥映は、それが嬉しかったのだ。

朝一緒に起きて、公園までラジオ体操に行く。

そんな、時間もお金も全くかかっていない、ただ一緒に出掛けただけというこの行為を、この人は喜んでくれたのだと。

これを愛おしいと、可愛いと思ってはいけないのなら、自分は一生恋なんてできない。

そんな事すら思う。

●中央　至近距離

「【変わらず上機嫌で。

主人公が、そういう意図をもって連れて行ってくれたのかと思うとますます嬉しい】

いや嬉しかったよ？
【『健全なお付き合い～』は、語尾が上がる】
『健全なお付き合い～♥』って感じで。
【少し間をあけてから。『こたないか』は『事はないか』という意味】
……でも、健全ってこたないか」

言うと、弥映、主人公の左耳側に寄ってささやきかける。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【にやにやと、嬉しそうにささやく。主人公をからかいたい】
かえってエロかったよね」※

弥映がにやにやと目を細める。
その声に、その表情に、主人公の心臓は、ぎゅわりと鷲掴みされる。
からかわれているのに、はしゃいでいる弥映が可愛くて、抱きしめたい。
でもそれができなくて、目を泳がせるしかない。

――ああ、昨日、私は知ってしまった。

恥ずかしければ恥ずかしいほど。嬉しければ、嬉しいほど。
『こんな事は、他の人とは絶対にできない』と思うほど。
記憶も、快感も、喜びも、心と身体に深く刻み込まれるという事を。

刻み込まれるほどに、心は、身体は、それがどんなものなのかを理解する。
だからすぐさま反応するようになって――……すでにほら。
今朝の事を思い出すだけで、全身が熱く、芯の部分が充血していくのがわかる。
でもそれは、えっちな事を考えているからだけじゃなくて……。
この人の事が、好きだからだ。

●左　至近距離
「【※マークまで、ラジオ体操での事を思い出して話している】
直前まで、ずっとやらしい事してたのにさ。
【『じじばば』は『おじいさんおばあさん』の意味】
しれっとじじばばに混じって。
『一晩で姉妹みたいに仲良くなりました♥』って顔して、普通に体操してるんだもん。
『この子、さっきまで裸であたしに抱きついて、汗だくでおねだりしてきてたんですよ～♥』

ってすっごい言いたかった。ふふふふ♥」※

弥映、主人公の正面に移動して、キスする。

●中央　至近距離

「【額に軽く一回だけキスする】

ちゅっ」

〈主人公〉

「もお……！」

主人公、怒ったそぶりを見せつつも、やはり弥映を可愛く感じてしまう。

弥映の言っている事は、一見、ただただいやらしい。

だが、もっと単純に受け止めれば『それ位、主人公と親しい事を周囲に言いふらしたい』と言っているようにも思える。

だから、本気で怒る気になどなるはずもない。

それから、それはそうとして……弥映の言っている事は正直、非常にわかる。

主人公だって本当は『昨夜の出来事を周囲にばらす』という、現実には起こらなかった、想像上の行為を思うだけで、たまらないのだ。
……だって。
自分の事を、真面目で善良な学生だとしか思っていない人々に囲まれながら、平然と弥映と公園を訪れ、列に加わって。
朝日のもと、何食わぬ顔で、でも、昨日の行為を思い出しながら運動するのは。
健全なようでとても不健全で、あまりにも背徳的だった……。

そして、全身にしみいるほど理解した。

私は性的な事が大好きな変態だ。
少なくとも、弥映ちゃんとする事が、何よりも大好きな人間だ。と。

●中央　至近距離
「【変わらず上機嫌で】
あはは。怒んないでよ。
ちゃんと外では大人しくしてたじゃん？
【少し間をあけてから。※マークまで、すごく幸せそうに。

昨夜の事を思い出すと、とても幸せな気分になる】
それに、昨日はすっごい幸せだったよ。
あんた一杯甘えてきてさぁ。名前も呼んでくれて、嬉しかった。
彼女できるって、こんな感じなんだなぁ……って思った」※

言うと、弥映は、恥ずかしそうに自分の前髪に触れる。
毛先を指先でいじって、照れたように軽く引っ張ったり、撫でたりしている。

その些細な仕草さえ、主人公は可愛くてたまらない。
だって、昨夜あんなにも甘えられたのは、あんなにも素直になれたのは。
受け止めてくれる弥映が驚くほど優しくて、嬉しそうで。幸せそうだったからだ……。

●中央　至近距離
「【唇に軽く、一回だけキスする】
ちゅ♥
【少し間をあけてから。
わざと心配そうな声音で】
あんたはやだった？　あたしに色々されるの」

追い打ちをかけるように、わざとらしく弥映が聞く。
嫌なはずがない。信じられないほど幸せだった。

だから……主人公は、ふるふると首を振る。
百パーセント正直に気持ちを伝えるのはまだ無理だが、最低限の意思表示はしたかった。

〈主人公〉
「そんなわけない。すごく、嬉しかった……」

●中央　至近距離
「【変わらず上機嫌で。嬉しくてたまらない】
ふふ♥　でしょー？」

恥ずかしくて、居心地が悪くて、顔を隠してしまいたくなるが、無意味だった。
弥映の顔はすでにくっつきそうなほど近く、そらしていた目線を元に戻すだけで、弥映がいとおしげにこちらを見ているのがわかる……。

そんなものを見てしまったら……。

〈主人公〉
「……ずるくない？　こういうの」

●中央　至近距離
【少しかすれた声で。
声音を少し変えてドキッとさせる】
うん。あたし、ずるいよ」

弥映、主人公の左耳に顔を寄せてささやく。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
【甘ったるくささやく】
だからしよ？」※

あぁ、もうダメだ。またしちゃう。
ううん。ちっともダメじゃない。私は早く、またしたかった。

寝るのが惜しい理由の一つは、その分弥映ちゃんとセックスできる時間が減るからだ。

――神様、私は欲望に弱い愚か者です。
セックスを覚えてしまったがゆえに、性欲に歯止めの利かなくなった弱き者です。
……でも、この人が好きなんです。
この感情の名前すら知らないのに、私はこの人と手を、唇を、身体全部を合わせる機会を、一度だって逃したくないんです。
まだ、この人の事、ちっとも知らないはずなのに。
この人の事が、可愛くて仕方がないんです。

〈主人公〉
「『だから』の意味がわかんない……♥」

●中央　至近距離
「【変わらず上機嫌で】
あはは。『だから』の意味がわかんないって？
【あっけらかんと】
あたしもわかんない。ふふふ♥

【少し間をあけてから。
声のトーンを変えてドキッとさせる。もう、有無を言わせない感じで】
でもしようよ」

弥映、主人公の左耳に顔を寄せてささやく。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【しれっとささやく。『これなら簡単でしょう？』という感じで】
あんた寝てるだけでいいから。ね？」

ＳＥ５　弥映が主人公に覆いかぶさる音
【最初から最後まで流す】

答える前に、弥映が覆いかぶさってきた。
主人公はこの、視界が暗くなる感じがたまらない。
『これから自分は、この人に好きにされるのだ』という予感が、たまらない。

〈主人公〉

「あ……」

●中央　至近距離

「【ここで声のトーンが通常に戻る。
普通に話すような感じでさらっと言う】
なんかさぁ。攻めるのってハマるね。
【少し間をあけてから。じんわりと嬉しそうに】
昨日も言ったけど。あたしの手と口であんたが気持ちよくなってくれるの、嬉しいよ。
【※マークまで、甘くからかう。本心を伝えたので恥ずかしい。照れ隠し】
後（あと）、あんたのエロい声聞くの好き。
我慢しようとしてる割に、すぐ出ちゃうよね。声。ふふふ。
一回イくの覚えたら、すぐイっちゃうようになっちゃったし。
【『すっごいやらしい』は『すっごい、やらしい』をつなげた形】
頑張ってるのに、すぐ負けちゃう感じ、すっごいやらしい」※

こうして主人公は、また弥映に負かされる未来を予告される。
それだけで、脳が痺れるような快感が全身に広がっていく。

だって、それがいい。負けるのがいい。負けるのが良すぎるのだ。
精一杯抵抗するふりをしながら、性的に負かされる快感に、望んで突き落としてもらう。
好きなようにされているふりをしながら、実際はしてほしかった事を、全部してもらう。
相手の思うままにされるなんて、恐ろしい事を許しているふりをしながら……。この人が自分を傷つけるはずはないという、絶対の安心感を持って抱かれる。
あまりにもこちらにとって都合のいい、最高の快楽。
それが幸せじゃないなら、これまで感じてきた『幸せ』らしきものは全て嘘だろうとすら思う。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※マークまで、少し意地悪に、でも愛情をこめてささやく】
負けちゃってるあんた、最高に可愛いよ。
【優しく、ゆっくり、一つ一つ言い聞かせる】
だから一杯。いくらでもいつでも。負けイキしていいんだからね」※

……そんな弥映は、主人公を煽るコツを、たった一晩で完全に理解したらしい。
的確に、主人公の心をとろけさせる事を言って、する。
軽薄そうに振る舞っているが、本当は頭のいい人なのだろう。

だが、本人にはその自覚がないようだ。

●中央　至近距離

「【ここで声のトーンが通常に戻る。自分のセックスの技量について述べる。少し自虐的だが、本人としては単なる事実のつもり】

ていうかね。あたし、別に上手くないと思うんだ？

【少し間をあけてから。すごく嬉しい】

でも、あんたは喜んでくれるじゃん。

『もっと』って言ってくれるじゃん？

【内心ドキドキしながら本音を伝える】

それって……かなり、嬉しい。よ」

だから、主人公は思う。

……もしかすると、弥映はとても自己評価の低い人なのかもしれない。

いや、自分を大切にする習慣のない人なのかもしれない。と、

だから、自分に厳しく、冷たくするのが当たり前で。

あんな壊れた靴で歩き続けようとしたり、ちょっと親切にされたからと言って、その日

出会ったばかりの私に、身体を差し出したりしたのかもしれない。

この予想が当たっているかはわからない。

でも、そう思うと、主人公は弥映という人間の事が、少しわかってきたような気がする……。

〈主人公〉

「私も弥映ちゃんとするの、好き。すっごい気持ちいい……♥」

主人公、精一杯の甘い声で、素直な気持ちを伝える。

●中央　至近距離

「【※マークまで、すごく嬉しい。だが、はしゃぎすぎない。

『主人公が自分に気を遣ってくれてるだけかも』『初めてなんだから、どういうのが気持ちいいのかわかってないのかも』と、内心自信がない】

あんたも？

そうだよね♥

【『二人でいる時は、ずっと乳首かクリをいじってあげてるもんね』

という意味で言っている】
約束通り、二人でいる時はずっと乳首かクリしてあげてるもんね。　※
【唇に軽く、一回だけキスする】
ちゅ♥」

だけど弥映は、これを言葉通りに受け取らない。
主人公は胸が切なくなる。
自分達はこれだけの事をする関係なのに、心はまだ遠い所にある気がするのだ。

〈主人公〉
「そういう事じゃ……」

だけど、そうだとして、主人公の行動は変わらない。
思ったまま正直に、できる限り誠実に接する。それ以外はないし、見つからないのだ。
主人公、快感にとろけながら、それでも、弥映の心に近づこうとする。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、少し意地悪に、でも愛情をこめてささやく。
主人公の話は聞かずに続ける。
『主人公は、気を遣って言ってくれているだけ』と思っている。
『ほら、またちゃんと、この『セックス覚えたて乳首』こねこねしてあげる』が正しい区切りだが、くっつけ気味に言う】
ほら。またちゃんとこのセックス覚えたて乳首こねこねしてあげる。
【特に意地悪に、でも愛情をこめてささやく】
もう勃起してるもんね。
【『この子達』は、左右の乳首をさして言っている】
もうさぁ。この子達。
あたしといるって事は、ずうっといたずらしてもらえるって事だと思ってない？
【わざと、そうするのが当たり前のように自然に命令する】
ほら。舌出して。
【甘く誘惑する】
ベロチューしながら乳首いじめられよ？」※

●中央　至近距離
「【唇に舌を入れてキスする】

ん……♥」

SE6　弥映が主人公に覆いかぶさる音2
【最初から最後まで流す】

主人公、従順に舌を出しながら、思う。
弥映とのキスは、すごく気持ちがいい。と。

だって、人間の唇が、舌がこんなに柔らかくて熱くて、重ねていると気持ちよくて。
溶けて一つになってしまいそうなものだなんて、昨日までの主人公は知らなかった。
それを、弥映が教えた。
弥映が変えた。
弥映が主人公の世界を別物にしてしまったのだ。

……だから主人公は、それを弥映に知ってほしい。
自分の世界が、昨日までとはいかに違っていて、鮮やかで、温かくて、明るいのかを、わかってほしい。
そうするには、どうしたらいいだろう？

●中央　至近距離

☆「【※15秒※　キスする。
無抵抗の主人公の舌を自分の舌でしっかり捕まえて、ねちねちキスする。
薄目を開けて主人公のリアクションを見ながらしているイメージ】☆☆

★　ん……っ♥　く。んっ……ふ。ん……くっ♥　れろれろ……ちゅ♥　ねちゅっ、ねちゅっ♥

【興奮して呼吸が荒くなる】
はぁ……はぁ……♥

【甘くからかう】
乳首くいくいされながらベロ吸われるの、気持ちいいね♥

☆【※15秒※　キスする。
先ほどと同じように、無抵抗の主人公の舌を舌でしっかり捕まえて、ねちねちキスする。
薄目を開けて主人公のリアクションを見ながらしているイメージ】☆☆

★　んんうっ……ふ♥　れろ……れろ……れろ……ちゅ♥　ちゅるる……じゅる♥　ちゅるるるっ♥」

弥映、一度左耳側に移動してささやく。

それは一方的に攻めたてているようで、とても奉仕的な行為だ。
弥映は、まるで恩を返すように、主人公に優しくする。
主人公の望む事をして、主人公のそばにいてくれる。
だから主人公はそれが嬉しくて、むさぼるように甘える。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【興奮して呼吸が荒くなる】
はぁ……はぁ。
こんなセックス大好きフル勃起乳首は。
【意地悪なようで優しく。】
※『痛い事をして来そう』には聞こえないように※
こうやって、ぐりぐり。ぐりぐりしてあげる」※

●中央　至近距離
☆「【※5秒※　キスする。軽く吸い上げるようなキス】
★　ちゅっ……ちゅるるっ♥　れろっ♥　ちゅぱ♥
【興奮して呼吸が荒くなる】

はぁ……はぁ。
【甘くからかう。『ちゅぶされちゃってる』は『潰されちゃってる』の意味】
ふふ。親指でちゅぶされちゃってるのに、ひくひくしてる。
【興奮して呼吸が荒くなる。うっとりと】
そんなにいじめられセックス好き？」

主人公、思う。

そうだ。その通りだ。大好きだよ。
と。

本音を言えば、できれば一日中でもこれをされ続けたい。
朝も夜もなく徹底的に弥映に負け続けて、みっともなくあんあん喘いで、心にも身体にもしみこむほど負け癖を付けてもらって。
弥映に、快楽に、どろっどろに依存したい。セックスしかしない人生を送りたい。
もしそれが叶うなら、夢のようだと思う。

……でも、それは果たして、自分らしい行動だろうか。

性的に『してもらう側になるのが好き』『負けてしまうのが好き』という事と。
『してもらう側だけでいたい』『ただ負ける事だけがしたい』という事は、また別の事なんじゃないだろうか？
『する側になる事』『優位に立ってみる事』を知らないまま、その反対だけを求めて生きるのは。果たして、自分らしい生き方だろうか？
――違う気がする。

弥映、位置は中央のままでささやく。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
【興奮して、かなり呼吸が荒くなる】
「……はぁ、はぁ。
【『燃える』は『もっと気持ちよくしたくなる』という意味で言っている】
※特に聞き手をドキッとさせる感じでお願いします※
可愛いよ。……すっごい、燃える」※

その時弥映が、こちらを征服して興奮しているような、服従して懇願しているような目でこちらを見た。

主人公はそれに激しく心揺さぶられて、この人が好きだ。この人が好きでたまらないという気持ちで一杯になる。
その理由は説明できないのに、胸はもうとっくに、心も身体も、熱くじーんと、燃えるような快感で満たされている。
こんな小さな部分を優しく刺激され続けるだけで、こんなに気持ちよくなれるなんて知らなかった。
弥映と出会って二十四時間も経たないうちに、自分はあまりにもたくさんの新しい知識と経験を手に入れてしまった。
主人公はそれが嬉しいし、幸せだし、感謝している。
でも自分は、弥映に何をしただろう。靴をあげて、泊まる場所を紹介して、泊まる部屋を少し豪華にしてあげて。それだけ？
それだけでもう『色々してあげた』『奉仕されるに足る存在だ』『十分に愛情表現をした』とでも言うつもりだろうか？
まだ全然、弥映ちゃんに何もしていないのに？

●中央　至近距離

☆「【※15秒※　キスする。甘くて丁寧な、熱心なキス。
さっきまでとのギャップを激しくして、ドキッとさせる】☆☆
★　ん……ちゅっ♥　ちゅ……ちゅ♥　ちゅ……ちゅっ♥　れろっ……ちゅ♥　れろれろ……ちゅ♥
【興奮して、かなり呼吸が荒くなる】
はーっ……はーっ……。はーっ……♥」

〈主人公〉
「んっ♥　んんうっ……♥」

そうだ。私はまだ、何もしていない。
『気持ちが伝わってない』と嘆くほど、気持ちを伝えてすらいない。
それなら、ワンナイトの関係になるのを断った時と同じように、もっと自分らしいアプローチを、この人にするべきだ。
それは……。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※マークまで、少し苦しそうに。呼吸を整えようとするが興奮で荒い。

『ゆるイキ』は『ゆるくイく』という意味】

……あ。背中そってきた。ゆるイキできそう？」※

主人公、そんな事を思いながら、恥ずかしく身体をのけぞらせて、弥映を見上げる。
こんなみっともない格好、弥映以外の前ではできない。
今の自分は、もっと乳首を触ってもらうために突き出して、舌を吸ってもらうためにだらしなく口を開けて、必死におねだりをしている。
たとえばこんなところを友達に見られたら、主人公はもう学校に行けないだろう。

それでも弥映の目はとても優しい。
口先では意地悪を言うくせに、主人公にとって不快なエリアには決して入り込まないように、注意深く加減してくれている気がする。

セックスするあいだじゅう、主人公はそんな優しさを、思いやりを、ずっと弥映から感じている。
それがとても嬉しくて、そんな弥映を、大好きだと思う。
自分もこの人に、何か喜ぶ事をしたいと思う。

弥映、左耳側に移動してささやく。
主人公がイきそうなので、ダメ押し。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【※マークまで、少し意地悪に、でも愛情をこめてささやく。
乳首を優しく押し込んでぐりぐり回すように愛撫している】
ぐりぐり、ぐりぐり。ぐりぐり。
ぐりぐり。ぐりぐり。しこしこ♥」

〈主人公〉
「あっあっぁっぁ♥」

主人公、弥映の指先の動きに合わせて、びくびくと背中を震わせる。
そして、出そうと思ったって、とても出せない、自分でもどうやって出しているのかわからない、どこから出ているかも不明な、切迫した声を上げる。

……あぁ、気持ちいい。気持ちいい。気持ちよすぎる……。

と、それ以外の事をまともに考えられないほどに思考力と語彙力を落とされて、ただ、快楽に耽る。

そんな主人公に、弥映はさらに、耳までほじくろうとしてくる。
乳首のいじめ方と耳のいじめ方を同じにして、めちゃくちゃにしようとしてくる。

●左　耳舐め
【※１０回※　かなりゆっくりと、十回とも、同じテンポで耳をれろれろする】
れろれろ。
れろれろ、れろれろ、れろれろ♥
れろれろ、れろれろ、れろれろ♥
れろれろ、れろれろ、れろれろ♥」

〈主人公〉
「んんんうっ♥　弥映ちゃん♥　弥映ちゃん♥　弥映ちゃん……♥」

だから主人公は、あっさりめちゃくちゃになる。
弥映の名前を呼びながら、他の誰にも見せた事がないのに、弥映にはもはや見せ慣れ始

めている、恥ずかしい姿をさらす。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

【※マークまで、すごく優しく】

「よちよち。いい子だから乳首イキするとこ見せて？
ちゃんとずっといじっててあげるから。
昨日までできなかったのに、今日すっごく上手になった。
乳首気持ちよくて、びくびくなるとこ見せて？」※

【『びくびくなる』は『びくびくって震える』という意味で言っている】

〈主人公〉

「うん♥　弥映ちゃ♥　弥映ちゃんすき♥　あ♥　んんんぅ……♥」

主人公、触れられているところから、じわっと広がるような快感に溺れる。
胸を張るように弥映の指先へ差し出して『もっとして下さい』と、あられもなくおねだりする。

●左　耳舐め

☆「【※15秒※　耳を舐める。先ほど同様甘くて丁寧な、熱心な耳舐め。
完全に主人公を落として、メロメロにさせる】☆☆
★　ちゅぷっ……ちゅ♥　ちゅ、ちゅ、ちゅ♥　ちゅっ……ちゅ♥　ちゅるるっ……ちゅ♥
【荒い息で、真剣な声で、ダメ押し】
ね？」

〈主人公〉
「うん♥　いぐ♥　いぐのくる♥　わかんないのくる♥」

……だけど、まだ、胸でイッた事はない。イきたいのに、どうしたらいいのかわからない。
沢山触れられてよくわかったが、クリトリスとは快楽の種類が違うのだ。
どうしたらイけるのか、イくのに近づくのかわからなくて、主人公は、必死に弥映に助けを求める。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【言葉に対して、余裕がない。興奮して、かなり呼吸が荒くなる】
イけそう？　いつでもイっていいよ♥」※

〈主人公〉
「やっぱわかんなっ♥　いつなるかわかんな♥」

すると、弥映がものすごく意地悪なような、ものすごく優しいような笑みで、主人公を見おろした。
優しく耳元にささやき、これまでしていない、新しい提案をする。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【ものすごく優しく。イくのに、補助が必要らしいと理解する】
数数（かずかぞ）えて欲しい？　いいよ。
【耳に軽く一回だけキスする】
ちゅ。
【優しく、ゆっくりささやく】
あんたも頭で、一緒に数えんだよ？」※

〈主人公〉
「うんっ……♥」

主人公、媚びた甘い声で頷いて、弥映の声に合わせる。
実を言うと、ただ素直に首を縦に振っただけで、数を数える事の意味はよくわからない。
だが、おそらく、ゼロになるのに合わせて身体を擦り付けたり、動かしたりしろという事なのだろう。

それならできる気がする。
でもそれじゃあ、完全に弥映ちゃんの支配下に置かれているようで、恥ずかしすぎる……。

それでも、主人公は弥映に従う。
こんなに恥ずかしい事があるんだろうか。
きっとあるんだろうが、今の自分にはこれも、気を失ってしまいそうなほど恥ずかしい……。そう思いながら、弥映の声を聞く。

だけど自分は、服従するようでどこまでも弥映に与えられ、その行動さえ実質的に支配している。
こんな関係のままなら、自分達の交際は、まず長く続かないだろう。

だけどそれを、弥映は咎めない。
それは優しいからだろうし……続かなくてもよいと思っているのかもしれない。

だけど主人公は、続いていきたい。弥映が好きなのだ。
カウントがゼロになって今の行為が終わっても、今度はもっと別の幸せな時間を過ごせるように、今度は自分が何かしたい。
具体的にどうしたらいいのかわからなくても。とにかく、したいのだ。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【かなりゆっくりと、10から0を、先ほどと同じテンポでカウントする。
主人公に優しい仕様で、等間隔で数える。途中で焦らしたりはしない。
ゼロで主人公がイく】
じゅーうっ。きゅーうっ。はーぁちっ。
なーぁなっ。ろぉーっく。ごーぉっ。
よぉーんっ。さぁーんっ。にぃーいっ。
いぃーっち……。ぜぇーろっ♥」※

〈主人公〉

「あぁぁっ……♥」

だから……。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【ものすごく呼吸が荒い。整えようとする】

はーっ……♥　はーっ……♥　はーっ……♥

【ものすごく嬉しい】

できたね……♥

【※マークまで、すごく優しく。

『背中ぐわってなっておっぱい張って』は『背中をそらして、おっぱいを突き出して』という意味】

背中ぐわってなっておっぱい張って。可愛かったよ。

【右耳にキスする】

ちゅっ……。

【ぼそっと、すごく優しく】

大好き」

今度は絶対、一人だけ気持ちよくなって、勝手に寝ちゃうなんてしない。
……次は私が、絶対、弥映ちゃんを気持ちよくする。

主人公、そんな事を思いながら、重い瞼を何度もしばたかせ、荒い呼吸を、少しでも早く整えようと息をする。
だけどいつまでも呼吸は荒く、心臓はドキドキして、当分収まりそうもなかった。

ここでフェードアウトして終了。